

「9 月」に見るケストナーの社会批判性

―詩集『13 か月』試論―

清沢 菜穂

1. はじめに

エーリヒ・ケストナー (Erich Kästner) による最後の詩集『13 か月 (Die Dreizehn Monate)』は、1955 年に出版された。この連作詩集は、1 月から 12 月までの月と架空の 13 月を題材とした 13 編の詩で構成されている。「13 月」を除いた 12 編は、最初に『シュヴァイツァー・イラストリールテ新聞 (Schweizer Illustrierte Zeitung)』から依頼を受けて執筆された¹⁾。これらの作品は 1952 年 12 月 30 日から 1953 年 12 月 7 日までの間、およそ月に 1 編のペースで同紙に掲載され²⁾、詩集として出版される際に前書きと「13 月」が新たに書かれた。

ケストナーの詩に関する先行研究の中では、社会観察と批判精神が際立った作品についての言及が多く見られた。対象となった作品は、「1899 年生まれ (Jahrgang 1899)」(I, 9-10)、「君知るや、大砲の花咲く国を (Kennst Du das Land, wo die Kanonen blühen?)」(I, 26) などのヴァイマル共和国時代に執筆された詩が多い。一方、『13 か月』を含む戦後に出版された 3 冊の詩集や、その他の戦後の詩に関する言及は少ない。『エーリヒ・ケストナー文献集 (Bibliographie Erich Kästner)』(2011)によれば、『13 か月』を主題として扱ったものとしては、書評が 8 本、比喩表現・言語芸術の観点からの研究が 1 本、教育・教授法の観点からの研究が 3 件確認されているだけである³⁾。部分的に言及している研究はあるが、それもゲルハルト・ザイデルが自然に捧げられた詩として「9 月」の一部を引用している⁴⁾ほか、レーモ・フークが天候、自然、季節の循環を扱った作品の一つとして『13 か月』の名を

挙げている⁵⁾にとどまる。

ケストナーの伝記の中でも、自然を扱った詩、あるいは従来のメランコリーを感じさせる詩としての評価が主で、読み手に対する特別な働きを持つ詩としては見なされていない⁶⁾。例えば、ケストナーと共に生きたルイーゼロッテ・エンデルレはこの詩について「美しさと香りと親愛に満ち、そしてあらゆるケストナーの作品が放つ憂愁がたくさん込められた抒情詩」⁷⁾であると述べている。また、クラウス・ドーデラーは、『13 か月』でケストナーが突如円熟し、日々の出来事ではなく自然の循環を描いたと、ケストナーの変化を指摘している⁸⁾。

詩集そのものに対する言及が多い中、個別の作品を詳細に分析したのは、リュディガー・ベルンハルトである。ヘルガ・ベマンも「5 月」「6 月」の一部について解釈を述べているが、ごく簡潔なものにとどまっている。

ベルンハルトは、ケストナーの詩を数点考察した著書『ケストナー 抒情詩作品 (Kästner. Das lyrische Schaffen) 』の中で「9 月」を取り上げている。『13 か月』の個々の作品を対象とした考察は、現在のところベルンハルトのものがもっとも詳しい。彼は、ライナー・マリア・リルケやルイ・フュルンベルク (Louis FURNBERG) による秋の詩や、ケストナー自身が秋をテーマとして書いた他の詩との比較を通じて、「9 月」の特徴を分析した。さらに詩人の伝記的要素を踏まえた内容の解釈、新即物主義らしい要素や道徳性の観点からの考察を行っている。彼の著書では「13 月」にも言及されているが、こちらは簡潔な内容説明であり、詳細な分析は行われていない。

このように先行研究では、自然やメランコリーなどの要素に目を向けたものが多い。ベルンハルトの研究に見られるように別の観点からの考察もあるが、批判精神を含む詩として捉えた研究は、現時点で確認できていない。

しかしケストナーは、戦後も政治詩やエピグラムなどの詩集を出版し、カバレットの演目でも社会の嘆きや過ち、寓意などを描いている。こうした傾向から、作品を通じて社会批判を行い、人々へメッセージを発していく姿勢は戦後も引き継がれているように思われる。

そこで本稿では、『13 か月』の中の作品考察を通じて、この詩集が社会批判性を持つかどうかを検討していきたい。今回は「9 月」を例として取り上げる。この作品はバルンハルトにより唯一詳細な解釈が行われている。さらにケストナーの詩には、同じく秋をテーマにした作品が多い。「9 月」は先行研究を手がかりに、詩集全体ではなく個々の作品に含まれる要素を考察することが可能で、比較対象となる作品が多く、より特徴を理解しやすいことから、本稿でもこの作品を対象として扱いたい。

考察にあたっては、まず作品の分析を行い、描写内容を確認する。そしてケストナーによる秋をテーマとした詩と比較を行い、「9 月」の特徴を明らかにする。その上で、作品が書かれた当時の社会状況を確認し、その時代において『13 か月』ならびに「9 月」がどのような意味を持ったのかを考察していきたい。

2. 作品考察

まずは「9 月」の内容を分析し、作中に描写されている情景を確認したい。その後に、同じく秋をテーマとしたケストナーの詩 10 編と比較し、作中に見られる秋のイメージを明らかにすると同時に、「9 月」の特徴を分析する。また、「9 月」だけではなく『13 か月』全体に共通して見られるテーマ「時間」についても考察を加える。

2-1. 内容分析

「9 月」は 1953 年 8 月 31 日に初めて発表された作品である。『13 か月』の前書き (I, 299-300) で、ケストナーは「詩人は 1 月を既に 11 月に書き、5 月を 3 月に書いた。12 か月の間、彼は一年を約 6 週間前先生じていた」⁹⁾と説明をしている。この説明に従うのであれば、この作品は 1953 年の 7 月に書かれたと推測される。

作品は以下に挙げる通りである。

Der September

Das ist ein Abschied mit Standarten
aus Pflaumenblau und Apfelgrün.
Goldlack und Atern flaggt der Garten,
und tausend Königskerzen glühn.

Das ist ein Abschied mit Posaunen,
mit Erntedank und Bauernball.
Kuhglockenläutend ziehn die braunen
und bunten Herden in den Stall.

Das ist ein Abschied mit Gerüchen
aus einer fast vergessenen Welt.
Mus und Gelee kocht in den Küchen.
Kartoffelfeuer qualmt im Feld.

Das ist ein Abschied mit Getümmel,
mit Huhn am Spieß und Bier im Krug.
Luftschaukeln möchten in den Himmel.
Doch sind sie wohl nicht fromm genug.

Die Stare gehen auf die Reise.
Altweibersommer weht im Wind.¹⁰⁾
Das ist ein Abschied laut und leise.
Die Karussells drehn sich im Kreise.
Und was vorüber schien, beginnt.

9 月

それはプラムの青と林檎の緑の
旗と共にある別れだ
庭はニオイアラセイトウとアスターを掲げ
たくさんのモウズイカが燃え立つ

それはラッパと
収穫への感謝と農民の舞踏会と共にある別れだ
牛の鈴を鳴らしながら入ってくる
茶色の色様々な家畜の群れが家畜小屋の中へ

それはほとんど忘れられた世界からの
匂いと共にある別れだ
ムースとゼリーは台所で煮えている
ジャガイモの枯れ葉を焼く炎が畑でくすぶる

それは祭りの賑わいと焼かれている鳥と
ジョッキの中のビールと共にある別れだ
船形ブランコは天に焦がれる
だがきっと十分に敬虔ではない

ホシムクドリは旅に出る
蜘蛛の糸が風になびく
それは賑やかで静かな別れだ
回転木馬は円を描いて回る
そして過ぎ去ったと思われたものが始まる (I, 310)

第1節から第4節は4行、第5節のみ5行構成のこの作品は、基本的な韻律はヤンブス（弱・強）だが、第1節から第4節の3行目の冒頭はダクテュロス（強・弱・弱）となっている。また第3節の2行目では弱拍が続く箇所（vergessenen Welt）がある。もっとも不規則であるのは第5節4行目であり、drehn以降の韻律が強・弱・弱となるだけでなく、「Die Karussells」と「drehn」の間に中間休止が挟まる。

全5節のうち、第1節から第4節は「それは……と共にある別れだ」から始まる。この4つの節には五感と結びついた要素が含まれている。しかしそれぞれの感覚を通じて季節の喜びを表現するというよりも、情景を語る際の一つのテーマとして五感が扱われているように思われる。各節に一つ中心的な感覚をテーマとして定めて、それに沿って情景を語っていく構成は、ベルンハルトが指摘したように、まさに「テーマの即物的な列挙」¹¹⁾といえよう。

第1節には色を感じさせる視覚的な要素が見られる。「プラムの青」、「林檎の緑」と具体的に色が表現されているだけでなく、ニオイアラセイトウ、モウズイカ、アスターもそれぞれの花の色を連想させる。植物に溢れる世界が牧歌的なイメージを想起させる一方で、この節における別れは軍旗と共にある。実際はこの旗は植物であり平和なものであるのだが、軍旗に例えることにより平和の中に戦争の気配が感じられ、不穏な空気が生じている。

第2節には聴覚に関わる要素（ラッパ、農民の舞踏会、鳴り響く牛の鈴）が登場する。小屋に戻っていく家畜たちや舞踏会の様子は、山地の村での暮らしを思わせる。アルプスやバイエルンにある山地の村では、6月末から7月はじめごろにかけて草を食べるために高原へ行った牛や羊が、9月に入ると山を下りて村へ帰ってきた¹²⁾。その際、牛は首に大きな鈴をつけていたという。「アルムの家畜おろし」と呼ばれるこの行事は、早いところでは9月8日のマリア誕生の日に行われ、遅い場合には10月上旬になることもあった。牛たちが無事に村に戻ると、村人たちは教会で感謝の祈りを捧げた後、牧人たちをねぎらう感謝の祭りを開いて、食事と酒、歌と踊りを楽しんだ。この

風習を収穫感謝祭とみなす見方もある。その見解に従えば、「9 月」の第 2 節に描写された「収穫への感謝」は、作物の収穫だけでなく、村に家畜が戻ってきたことも含めての感謝とも考えられる。詩に描かれている場所が山地であるかは特定できないが、家畜小屋に入る牛の様子や祝宴の様子が実際の風習と類似することから、第 2 節に描かれているのは家畜を育てて暮らしている人々の生活の一部であると思われる。

第 3 節に見られるのは嗅覚と結びついた要素（匂い、ムースとゼリー、ジャガイモの葉を焼く炎）である。この節にも、収穫を終えて収穫物を料理し、残った葉を燃やすという牧歌的な風景が見られる。ムースとゼリーを煮る匂いも葉を焼く匂いも、自然の中で暮らす人々にとっては日常的な香りである。自然と共に生きる人々だからこそ感じる機会がある匂いでもあるだろう。それらを示す「ほとんど忘れられた世界からの匂い」とは、自然の外で生きている人々が忘れてしまったような、自然の中の暮らしに存在する匂いではないかと思われる。ケストナーは『13 か月』の前書きで、この詩集を「大都会人のために書いた」（I, 300）ことを語っている。前書きに描かれた大都会人たちは、自然をまるで博物館に展示されている品々のように鑑賞する人々で、彼らにとって自然とは日曜日に郊外で見るものである。すなわちここでいう大都会人とは、自然と共に生きているわけではなく、自然から離れた人々である。そのような人々にとって、「9 月」に見られる自然と共生する世界は「ほとんど忘れられた」ものだといえよう。

第 4 節の前半には、味覚に関連する要素（焼かれている鳥、ジョッキの中のビール）が見られる。この二つと「祭りの賑わい」からは、賑やかな祝宴の様子が思い浮かべられる。ベルンハルトはこの光景とオクトーバーフェストとの関連を指摘している¹³⁾。しかし家畜と共に暮らし収穫を祝う作中の人々からは、純粹に自然の中で暮らしている人々としての印象が強い。特に第 2 節で示された「収穫の感謝と農民の踊り」を踏まえると、第 4 節にも収穫感謝祭の様子が描かれていると考えられる。

収穫感謝祭が開かれる日は定まっているわけではない¹⁴⁾。ヨーロッパ中部

の風習では、夏の始まりとされる聖ヤコブの日（7月25日）に収穫が始まり、聖バルトロメウスの日（8月24日）が秋の始まりとみなされていた。この聖バルトロメウスの日には多くの地方で収穫祭が行われた。そして聖ミカエルの日（9月29日）は農民が犁をしまう日とされ、農作業の一つの区切りであった。この日には各家庭で特別なごちそうが出され、地方によっては宴会が開かれた。その際に供される食事は、鶏肉やガチョウがよく知られている。さらに収穫じまいの宴会の後ではダンスが行われた。教会がその町や村で創立された日を祝う教会創立祝いの催し「キルビイ（キルメス）」を兼ねて収穫感謝祭が行われることも多かったようである。キルビイ（キルメス）は、教会創立日の日付にこだわらず、創立への感謝を込めて収穫祭と共に行われたという。農作業が一段落した秋に行われるのが通例であったこの行事は、大抵は10月の第3日曜日に行われていた。

同じく『13 か月』に収められた「8月」の第1節は、「今や年は大鎌を振り上げ／農民のように夏の日を刈り取る」（I, 309）と、農民による収穫を思わせる描写で始まる。これは7月末から始まる収穫を意識したものだと考えられ、『13 か月』には伝統的な農民の暦も取り入れられているといえる。この点からも、「9月」の祝祭風景は農民の生活に見られるものに思われる。

第4節後半ではブランコについて述べられている。この舟形ブランコは「天に焦がれ」ていて、あたかも神のいる場所に憧れる敬虔な信徒のようであるが、実際には「十分に敬虔ではない」。この表現から、舟形ブランコは信徒のように空を目指しながら、実際はそのような宗教的な要素は持っておらず、もっと日常的な存在であると感じられる。ヘルマン・クルツケは戦後のケストナーの態度について、「一般に彼の作品があらゆる宗教的な要素を欠いていたように、キリスト教の改革にも関心を持たなかった」¹⁵⁾と述べている。この考察を踏まえると、本作も同様に宗教的な文脈から切り離された作品であると考えられ、第4節で「敬虔ではない」と述べることで、語り手自らこの作品と宗教との関連を否定しているように思われる。先に述べた農民の暦も、聖人の日や教会創立日などの宗教的な要素と関連してはいるが、

この作品の中では宗教との関連は感じられず、農民の風習としての側面が強い。第4節でブランコの宗教的解釈を否定することで、本来は存在する歳時と宗教の関連を薄めているとも考えられる。

第5節は過ぎ去るものと戻ってくるものが描かれた、循環する世界が感じられる節である。旅に出るホシムクドリは変わりゆく季節を、秋特有の蜘蛛の糸が風になびいていく様子は秋の終わりを思わせる。これらは一見過ぎ去っていくだけに思えるが、ホシムクドリは季節が巡れば再び戻ってきて、蜘蛛の糸もまた秋になれば現れる。つまりいずれもいつか戻ってくるもので、本当に過ぎ去ってしまったものではない。だからこそケストナーは最後に「過ぎ去ったと思われたものが始まる」と書いたのであろう。さらに、円を描いて回るメリーゴーランドも循環を連想させ、この節に感じられる循環というテーマをより際立たせている。

第5節の別れはそれまでの節とは異なり、五感との強い結びつきは感じられない。ベルンハルトは、詩の語り手が変化に触れてそれを知り、別れは新たな始まりであるという認識に至る様子が触覚と関連していると考察している¹⁶⁾。たしかに詩の語り手は循環する時間を肌で感じ取っているといえるが、第5節には物質的な接触は感じられず、触覚に関わる語も見出せない。時間が持つ円環性の体感を触覚に関連するものとみなすのであれば指摘の通りといえるが、その場合でも他の4つの節と比較すると五感との結びつきは弱い節であろう。

この第5節は唯一5行ある詩節である。最終節を5行、それ以外の節を4行でまとめる構成は、既に「1899年生まれ」、「即物的なロマンス」をはじめとした戦前の作品に見られる。この第5節では、それまでの4つの節で第1行目に置かれていた「それは……別れだ」という文が、中央の第3行目に置かれている。先に述べた五感という主題の希薄さに加え、構造の点でも例外となるこの節は、詩全体の中でも重要な箇所だと考えられる。特に第1節から第4節までとは置かれる場所が変わっている、別れについて語る行、つまり「それは賑やかで静かな別れだ」という内容が重要視されているのでは

ないだろうか。

第5節の別れは「賑やかで静か」なものであるが、相反する二つの単語で形容されるこの別れとはどのようなものだろうか。賑やかさ (laut) は、舞踏会や宴会などの音としての賑わいのほか、色とりどりの植物や動物による視覚的な賑わいも含めての言葉として解釈できる。一方で「静か (leise)」という語は、静寂を示すのではなく、「そっと、かすかに」を表す語として捉えることができる。すなわち賑やかで静かな別れとは、人々が宴を催し、色彩に溢れた自然の中で過ごす中、目立たずにそっと訪れる別れだと考えられる。

最後に、この別れとは何との別れであるかを考えていきたい。この作品に描かれた情景の後には「過ぎ去ったと思われたもの」、つまり一度は失われながらも再びやってくる「循環する」ものがやってくる。「9月」に続く詩「10月」(I, 310-311)と「11月」(I, 311-312)を見ると、冬を感じさせる要素が「9月」よりも多く見られ、冬の気配が次第に強く感じられるようになっていく。季節はまさに循環するものであるため、これから始まる過ぎ去ったものとは冬ではないかと思われる。そして冬は沈黙や死のイメージに繋がる季節で、「9月」に描かれた賑わいや生命に溢れた世界とはまるで異なるものである。この点を踏まえると、「9月」における別れとは、寒さや冷たさを感じない季節との別れであり、これから冷たく静かな季節へ進んでいくことを示していると考えられる。

2-2. ケストナーにとっての秋

さて、ここまでは主に「9月」に注目して分析を行ってきたが、ケストナーは他にも秋をテーマとした詩を書いている。フークはケストナーの詩において、春に並んでもっとも頻繁に登場した季節が秋だと説明している¹⁷⁾。

ここでは「9月」同様に秋をテーマにした作品を分析し、ケストナーが秋をどのように捉えていたのかを考察する。その上で従来の作品と「9月」のそれぞれに見られる秋を比較し、「9月」の特徴を探っていきたい。今回は、

(1) 戦前に書かれた秋の詩 6 編、(2) 戦後に発表された秋の詩「秋らしい逸話 (Herbstliche Anekdote)」(I, 286) と戦後のカバレットで上演されたシャンソン「秋の歌 (Herbstlied)」(II, 373-374) の 2 編、(3) 『13 か月』で「9 月」と同じく秋を主題としているといえる「10 月」と「11 月」の 2 編、以上の 10 編を考察対象として取り上げる。

まずは (1) と (2) の 8 編を検討したい。今回 (1) の秋の詩として扱うのは、「秋の紳士 (Herr im Herbst)」(I, 22-23)、「列車からの秋 (Herbst vom Zug aus)」(I, 339-340)、「全秋の秋 (Herbst auf der ganzen Linie)」(I, 251-252)、「全方位への悲歌 (Elegie nach allen Seiten)」(I, 198-199)、「模範的な秋の夜 (Exemplarische Herbstnacht)」(I, 191-192)、「雨の 11 月 (Nasser November)」(I, 252-253) である¹⁸⁾。これらの作品と (2) の作品は、いずれも『13 か月』以前に発表あるいは上演された¹⁹⁾。この 8 編の内容と表現に注目すると、3 つの大きな特徴が見られた。

第一の特徴は、寒さや孤独を感じさせる表現である。先に挙げた作品の中では「寒い (kalt)」(「列車からの秋」、「全秋の秋」、「全方位への悲歌」、「模範的な秋の夜」) や「凍える (frieren)」(「雨の 11 月」、「全方位への悲歌」) といった寒さを表す言葉がよく用いられている。「模範的な秋の夜」では「天の川で雪が降った」(I, 192) と語られ、人間たちが生きる世界のことではないにせよ、その天候そのものが寒さを示している。

「模範的な秋の夜」では描写されている場が無人であり (I, 191-192)、「雨の 11 月」の中の通りは「慰めのない」状態である (I, 252) など、寂しさを感じさせる表現が含まれる作品もある。「秋の歌」では「心は部屋のように空っぽのままだ／心は待っている、誰かを待っている」(II, 374) と歌われ、人間の孤独を感じさせる。このように寒さや孤独と関連する語が散見されることから、ケストナーは秋を寒いもの、もの寂しいものとして捉えていたと考えられる。加えて時折見られる雨天の詩(「列車からの秋」「雨の 11 月」)からは、雨雲に覆われた光の射さない世界や冷たい秋の雨が連想され、寒々しく重苦しい印象を与えている。

第二の特徴は、生命の欠如、死との関連である。「秋の紳士」において「レーマンの娘は棺に入れられ」る (I, 22)。「全方位の悲歌」には「しおれたバラ」 (I, 198) が描かれ、自分自身と会話する老人の様子は「まるで死と交渉しているかのようだ」 (I, 198) と例えられている。「秋らしい逸話」においても舞台は墓地とされており、死のイメージが切り離せない。

しかし、秋は滅びを予感させるものの、完全な終末ではない。「全方位の悲歌」の中で、秋は万物の老朽・荒廃をもたらすものとして描写されている。そして秋を相続するものは「冬」と「愚かさ」であり、そこでは希望が焼かれるとされる (I, 198)。つまり秋の次に来る冬こそが真の滅びの季節であり、秋は死の季節そのものではなく、死の一手手前の季節であると考えられる。

第三の特徴は、色彩の描写である。「列車からの秋」では、「秋はここにある／そして世界は色付く (Der Herbst ist da. Und die Welt wird bunt.)」と述べられ、秋の世界の色が **bunt** と表現されている。形容詞 **bunt** は葉の色を表す語としても多用され、„die bunten Blätter“ (「列車からの秋」)、„die bunten Laubgardinen“ (「全くの秋」)、„ein Rudel bunter raschelnder Blätter“ (「模範的な秋の夜」) といった表現が見られる。しかしこの場合の色彩は秋の葉の色であり、これらの葉はいずれ落ちていく。先に述べたように、ケストナーが描く秋には冷たさや寒さが感じられ、死のイメージとの繋がりが冬の予感を秘めている。このような秋の中では、色付いた葉は美しさよりもやがて命が終わるということを強く感じさせ、秋の終わりを思わせると同時に、死の季節である冬の訪れを想起させる。すなわち、寒く冷たい季節に見られる色付いた葉は、色鮮やかでありながら、終末のイメージを既に含んでいると考えられる。

『13 か月』以前の作品を見ると、以上の3点がケストナーの描いてきた秋の特徴として浮かび上がってくる。これらの特徴から、ケストナーが以前から「寒く寂しい季節」「命が終わっていく季節、終わり (=冬) に向かっていく季節」として秋を描いていたことがわかる。

ここまで 8 編の作品に描かれた秋の特徴を考察したが、それぞれの作品において秋は常に同じイメージで描かれているのではない点には注意しておきたい。ここに挙げた作品の秋は、寂しさや冷たさの程度に差が見られる。

「秋の紳士」や「模範的な秋の夜」、「雨の 11 月」には、冷たさ、寂しさがはっきりと見られる。しかし「全方位への悲歌」では、生命が死んでいく季節として秋が描かれると同時に、アスターや色付いた庭の描写が見られ、まだ生命の気配が感じられる秋も描かれている。また「列車からの秋」では、枯れた風景が描写される一方で、景色の中には子供の姿もあり、人々の生活が感じられる。ここに見られる秋も、冷たさや孤独をはっきりと前面に出しているわけではない。

この二種類の秋のイメージは、『13 か月』に含まれる「10 月」と「11 月」の 2 編にも引き継がれている。「10 月」ではまだ生命の気配を感じさせる秋の姿が、「11 月」では死に近い秋の姿が描かれている。そしてどちらの月も「9 月」より冬の気配を感じさせる要素が作品の中に含まれている。「10 月」には菊やバラ、緑が存在し、完全に枯れた季節ではないが、寒さを表す語（fröstelnd、frieren）が含まれている（I, 310-311）。そして、ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテの作品から引用された²⁰⁾「死して成れ！（„Stirb und werde!“）」²¹⁾（I, 311）という最後の格言は死と再生のイメージに繋がる。

「11 月」は色がない世界を描いており、弔い、嘆き、死のイメージが強い。さらに「冬は葉を落とした枝の上にもう座ってい」て、やがて訪れる冬の気配も強く感じられる（I, 312）。

一方で、「9 月」はここに挙げた 10 編の詩のような特徴は持たない。「9 月」では孤独ではなく賑わいのある世界が描かれている。この作品では、寒さも死もはっきりと描写されず、最終節でわずかに冬の訪れが予感されるだけである。代わりに収穫の季節としての秋が前面に押し出されている。色とりどりの花や家畜小屋に戻る牛、自然と共に生きる人々が描かれたこの作品では、先に述べた生命の気配が残る秋よりもさらにはっきりと命の存在が感じられる。こうした特徴から、これまでは秋の冷たさ、寂しさに目が向けら

れていたが、「9 月」では収穫を祝う季節としての秋や祝祭の賑わいに目が向けられていると考えられる。

2-3. ケストナーの時間意識

「9 月」には円環的な時間意識が見られるが、時間という主題は『13 か月』全体を通じて見られるものである。ここでは一度『13 か月』そのものの主題を考察する。また、ケストナーの作品には、人間と時間の関係性が示された箇所がある。そこで詩とカバレット作品をいくつか取り上げ、その中で人間にとって時間がどのようなものとして位置づけられているのか分析する。最後に、時間という主題が「9 月」にはどのように表れているかを確認し、作品からうかがえる時間像を踏まえて「9 月」を読んだ場合、どのように読めるのかを考察していく。

まず『13 か月』の中に描かれた時間を見ていきたい。詩集には「1 月」（I, 301）に誕生する一年の姿が、「12 月」（I, 312-313）に死を迎える一年の姿が描かれ、1 月を始まりとして 12 月を終わりとする直線的な時間の捉え方がうかがえる。また、物事の変化や季節の移り変わりが示されている箇所が多く、時間の経過についても語られている作品だといえる。

詩集の中で、時間は始まりの 1 月から終わりの 12 月まで進むが、その中で循環する存在と、終わりまで行きついたら再生しない存在が示されている。

循環する時間を持っている存在は、一年という年月、そして季節である。例えば「1 月」では「一年は小さくまだ揺り籠の中にいる／しかし十萬歳だ」（I, 301）と 1 年の状態が述べられている。生まれたばかりであるにもかかわらず十萬歳である状況からは、1 年が繰り返して生と死を繰り返してきたことがうかがえる。「4 月」（I, 304-305）でも「一年は老いて日ごとに若返る」と述べられているが、これは時間の経過と共に一年の終わりである 12 月に向かう、つまり老いていくと同時に、一年の誕生である 1 月に向かうことで、また新しいものに「若返っていく」様を語っていると思われる（I, 304）。「12 月」では「再びニコラウスが地を踏みしめて歩いて」きて季節の循環が

示され、同作の結びにおいては一年が自らの最後の日を知っていること、つまり既に死を経験したことが語られている (I, 312)。

このような円環的な時間は、自然と結びついた時間である。古代文明において自然は時間の流れや尺度の元になり、期間や時の流れを計る手段であった²²⁾。古代ギリシャ人たちは自然の円環的な動きを重視し、円環的な時間意識を好んだという²³⁾。さらに、時間の経過自体が天体や季節の循環を観察した結果として生じた観念であるという見方もある²⁴⁾。このように自然と密接に関わっている時間意識は、同じく自然との結びつきが強い『13 か月』の作品にも取り入れられている。また、キリスト教の歳時暦も、クリスマスや復活祭などの祭日が農作業に影響する天文学的現象と関連し、キリスト教以前の太陽崇拜に由来するものだと指摘されている²⁵⁾。この点からも、歳時暦に基づいた農民の暮らしの描写が含まれる『13 か月』は、円環的な時間との関わりが深いといえるだろう。

なお、円環的な時間意識は『13 か月』以外の作品にも認められる。例えば「全くの秋」では、一年について「またもやほとんどが過ぎ去った」(I, 251)と述べられ、ここでも1年が繰り返し過ぎ去っていくものと捉えられている。

他方で、『13 か月』には直線的な時間を生きている存在も見出せる。例えば「十二月」の結びでは、「一年は自分の最後の日を知っている。／そして君は自分の最後の日を知らない」と「ブロンズの鐘」が語りかける (I, 312)。その言葉の中には、既に死を経験して繰り返し生まれ変わり、死を知っている一年と、死を知らない「君」の姿が見出せる。この「君」が具体的にどのような存在であるかは語られていないが、自然と同じ円環的な時間を持つ一年と対置されている点や、一度しか死を迎えられない点から、ここでの「君」は人間と考えられる。

ケストナーの作品には、人間と時間の関係性が示されているものもある。「全くの秋」では「時間は輪を描く／我々は時間の一步一步に従う」(I, 252)と述べられている。ここでは循環する時間の姿が見られると同時に、

人間が従うべきものとしての時間が表現されている。また、時に従って歩くという行為は「10月」にも示されている。

『世界舞台(Die Weltbühne)』に掲載された後にカバレット「見世物小屋(Schaubude)」でも上演された「1947年のドイツのメリーゴーランド(Deutsches Ringelspiel 1947)」(II, 108-114)では、時の寓意が一つの役として登場する。作中で時は「お前たちは時の裾についた埃だ」(II, 114)と人間たちに向けて発言し、「無限の時を刻む音の前に沈黙せよ！／時に耳を傾けよ！」と要求する。こうした描写からも、ケストナーにとって時間は人間より上位にある強大なもので、人間がもっと注意を払う必要がある存在として捉えられているように思われる。

「9月」では、秋の終わりが描かれ、冬の始まりが予感されている。この作品では、「時間の経過」という主題が、季節の移行として扱われている。時間が経過することは、円環的な時間を持つ自然にとっては特別な意味を持たない。しかし直線的な時間を生きる人間の観点から見ると、時間が過ぎていくことは終わりに近づくことである。冬が滅びの季節であることは既に述べた。さらに『13か月』では、一般に1年の終わりである「12月」に老人のイメージや「最後の日」(I, 312-313)という死のイメージが取り入れられ、この月が一生の終わりであるかのように描かれている。この点からも、9月から先の月に進むこと、冬に向かっていくことは、人間にとって死に近づくことであるといえるだろう。そして時間よりも小さな存在である人間は、進んでいく時間に逆らうことはできず、従い続けるしかない。直線的な時間を持ち、時の経過から逃れられない人間の視点から読むと、これから死の季節に向かうしかない状況が、「9月」にもの寂しさを漂わせているように思われる。これまでに『13か月』に対して指摘されてきたメランコリーは、「9月」においてはこのような形で表れているのではないだろうか。

3. 「9月」の社会批判性

ここまでの分析で、「9月」は生命を感じられる賑わいのある秋を描いた

詩であり、同時に円環的な時間を強く意識させる作品であることが明らかにできた。最後に『13 か月』ならびに「9 月」が社会批判性を含んでいるかどうかを考察していきたい。まずはこれまでのケストナーによる秋を扱った詩と戦後の作品の特徴を確認する。その上で「9 月」が執筆された当時の社会状況を確認し、その状況下で「9 月」をどう読むことができるか考察していく。

3-1. 第二次世界大戦以前・以後の特徴の連続性

「9 月」の社会批判性について考察する前に、ケストナーが書いた第二次世界大戦以前の詩と戦後の詩に見られる特徴を整理しておきたい。

ヴァイマル共和国時代に出版された『腰の上の心臓 (Herz auf Taile) 』(1928)、『鏡の中の騒音 (Lärm im Spiegel) 』(1929)、『ある男が通知する (Ein Mann gibt Auskunft) 』(1930)、『椅子の間の歌 (Gesang zwischen den Stühlen) 』(1932) に収められた詩の中には、社会の状況をケストナーの鋭い観察に基づいて描写した作品が見られる。そうした作品の中では、反戦、反軍国主義から貧困や性の乱れまで、多様なテーマが扱われていた。

1936 年に出版された『ケストナー博士の抒情詩の薬箱 (Doktor Erich Kästners lyrische Hausapotheke) 』には、それまでに書かれた作品のうち政治的な色合いのない作品が、いくつかの新たなエピグラムと共に収録された²⁶⁾。

戦後の詩集としては『自分の本に目を通す (Bei Durchsicht meiner Bücher) 』(1946)、『短く簡潔に (Kurz und bündig) 』(1948)、そして『13 か月』が出版されている。『自分の本に目を通す』には初期の 4 詩集から政治や社会に関する詩が集められた。『短く簡潔に』はエピグラムを集めた詩集であり、そのうちの大半は 1943 年には既に書かれていたものだった²⁷⁾。ただし、1945 年から 1946 年の間に『ノイエ新聞 (Neue Zeitung) 』紙上に発表された作品も含まれているほか、前書きと一部の作品は 1950 年の第 2 版が初出である²⁸⁾など、戦後に書かれた作品も収録された詩集である。戦後の詩のみで構

成された詩集は『13 か月』だけであり、全編が戦後に書かれた詩であるという意味では「新しい詩を収録した唯一の詩集」²⁹⁾ともいえるだろう。

先に述べたように、『13 か月』は、主に自然の詩としての側面が取り上げられ、内在するメランコリーを指摘されることが多い。しかしケストナー自身は、第 2 詩集『鏡の中の騒音』に収録された「散文的な途中発言 (Prosaische Zwischenbemerkung)」(I, 87-88) の中で単純な自然賛美の詩を否定し、魂に有用な「実用詩」(I, 88) を書く詩人でありたいと述べている。さらにケストナーは戦後になって、作品自体は戦前・戦中のものを含むとしても、政治詩やエピグラムからなる詩集を出版している。こうした点から、戦後に何らかの転向がケストナーに生じたというよりも、戦後も詩を魂に有用なものとして捉え続け、読み手の精神に対する詩の働きを信じていたのではないだろうかと推察される。そして、戦後に書かれた『13 か月』もこの姿勢を反映した詩集であると考えられる。

3-2. 秋の詩の主題とケストナーの精神性

『13 か月』の収録作品が持つ特性を考察するにあたって、まずは同じく自然をテーマとした作品と比較し、ケストナーの自然の詩がどのような作品であるかを明らかにする。今回は先に挙げた秋をテーマとした作品と『13 か月』を考察対象とする。

「9 月」以前に書かれた秋の詩は、季節を感じさせる要素を含んではいるものの、単なる自然を歌った詩にとどまっているわけではない。これらは、自然の美しさではなく人間の孤独、悲しみ、苦しみを中心に置いていた。例えば秋になってもコートをもたない乞食 (I, 22) や失業者 (I, 198) は貧困を示している。「列車からの秋」では買収や交通事故、弁護士の自殺、銀行家の失踪などのニュースなど、悪いニュースが絶えない社会も垣間見える (I, 339)。売っている花がいかにしおれているか見ることができないままに売り続ける盲目の男 (I, 198) や自分自身と二人きりで歩む夜の街の様子 (I, 192) からは、社会の冷たさや人間の孤独が感じられる。「雨の 11 月」「秋

らしい逸話」には明確な社会状況の描写はないが、「雨の 11 月」での自然描写は寂しい季節を感じさせる程度にとどまり、「秋らしい逸話」においては題名を除いて自然を感じさせる要素が登場しない。ゆえに両作品とも、自然賛美が主体の詩とはいえないだろう。このように、本稿で取り上げた「9 月」以前の秋の作品には、自然だけではなく人間が登場することが特徴的で、人間の悲しみや苦しみを示している詩も多い。この点から、ケストナーの秋の詩は、季節よりも社会や人間を描くことを目指していたと思われる。また、これらの作品では、秋の様子が *bunt* や *kalt* などの簡潔な語で表現されており、情感豊かに自然を歌い上げる詩とはいいたくない。このような表現をあえて用いている点からも、ケストナーによる秋の詩が、自然の美しさを讃える詩とは一線を画していたといえる。

ベルンハルトによれば、「9 月」以前の秋の詩では社会的な苦しみが主題であったが、第二次世界大戦の後ケストナーは道徳的な面を後退させて、「自然の美しさや人生を新たにすること、そして時の流れへの回帰」³⁰⁾を取り入れるようになったという。たしかに『13 か月』の中では、自然の存在が強く感じられることは疑いようがない。「9 月」でも多数の植物の名前が挙げられ、牧畜の風景が描かれている。そして、ジャガイモの葉を焼く、収穫を祝うなどの農業と結びついた生活風景も見られる。自然が前面に押し出されている点は過去の作品と比較して大きく異なっているため、ベルンハルトが指摘するような道徳的側面の後退も認められるといえるだろう。ハヌシェクもまた、戦後のカバレットにおいて「餓えて弱った観客は、ケストナーや他の作家たちによる、批判があるものの穏やかなテキストを、12 年間知ることのなかった風通しの良さのために喜んだ」³¹⁾と説明している。この説明からは、ケストナーがカバレットで発揮した批判精神は、戦前よりも和らいだものだったとうかがえる。ただし、ハラルト・ハルトウングが指摘したように、「9 月」以前の作品でも自然の描写があり、自然の詩らしい要素が全くないとはいいたくない部分もあることも、念頭に置いておくべきだろう³²⁾。

このように、戦後のケストナーには批判性の後退が認められる。しかし

『13 か月』の前書きにおいて、この詩集は「一人の大都会人が大都会人のために書いた」（I, 300）ものだと述べられている。そしてその「一人の大都会人」、つまりケストナーは「試案を試み」るが、その理由を「人々は思慮を失う可能性があり、それを再度見つけなければいけないからだ」と説明した（同）。そして彼は「2,3 行の詩に何ができる」のかと疑いを抱き、それ「にもかかわらず」詩を書き留めている（同）。この前書きからは、ケストナーが人々のために詩を書き、詩の無力さに気づきながらも、詩が与える影響を信じていたことが推察される。

また、『13 か月』は自然を描くと同時に繰り返し戦争・終末のイメージも語っている。「9 月」では花が軍旗に例えられていて、ラッパも軍隊と繋がる要素である³³⁾。第4節の„Getümmel”は賑わいを表すと同時に、混乱も意味する語である。そして「9 月」には別れが描かれているが、これは軍旗やラッパ、賑わいと結びついている。作中に別れの悲しみははっきりと描写されていないが、平穏から離れた意味合いを持つ語と結びつくと、戦争や混乱による悲しい別れのイメージに繋がっていく。

さらに『13 か月』の冒頭に置かれた「1 月」でも「一年は平和を夢見ている。あるいは戦争を夢見ているのだろうか？」（I, 301）と、戦争のイメージが語られている。そしてこれまで見てきたように、「10 月」「11 月」には死の気配が感じられ、「12 月」では「そして君は自分の最後の日を知らない」（I, 313）と、直線的時間の終わりが示されている。

戦争や終末のイメージは、以前のケストナーの詩でも扱われてきた。「1899 年生まれ」には、まだ年若いうちから戦争に巻き込まれた一世代の様子が描かれている。「ヴァウリヒ軍曹（Sergent Waurich）」（I, 65-66）や「軍服を着た最上級生（Primaner in Uniform）」（I, 139-140）には、第一次世界大戦の間にケストナー自身が経験した出来事との繋がりが見られる。そして「君知るや、大砲の花咲く国を」をはじめとした一部の戦前の詩には、反戦・反軍国主義の要素が指摘されている³⁴⁾。「最終章（Das letzte Kapital）」（I, 171-172）では人類の滅亡が描かれているが、これは毒ガスによってもた

らされた人為的な滅亡である。

『13 か月』には、戦争や終末のイメージだけではなく、人間の世界の悲しみや苦しみも描かれている。「3 月」(I, 303-304)で太陽が読むものは「起こったこと」、つまり「悲惨な出来事」である(I, 303)。そしてこの詩の第2節では「大潮と事故／嵐と雪崩—／はたして一度も平穏はないのだろうか／地上の彼らには」と語られる(同)。「1 月」では「大晦日であらゆる放送局で聞いた／空の下でも変わるものもあり／そして我々以外はずっと良くなるものもあるらしいということを」(I, 301)と、人間の世界における変化の可能性が語られるが、あくまでも伝聞であり、実際に変化が期待できるかは定かでない。

このように『13 か月』では、悪い出来事が多く、良くなるものがあるともいえない場所として人間の世界が語られている。ゆえに、戦争に繋がる要素も、人間の世界における悲しみの一つとして描かれていると考えられる。さらに人間は有限の時間を生きる一方で、自然は円環的な時間を生きている。一度終わりまで行きついても再び循環する自然に対して、いつか必ず終わりを迎えてしまう人間は、その直線的な時間そのものが悲しみの一つであるだろう。

詩集に見られるこのような描写や、自然との対比から、悲しみや苦しみの多い世界で生きている儚い存在としての人間が浮かび上がってくる。自然と比べた時の人生の儚さや、人間の世界における苦しみの多さを感じさせる要素は、実際の人間の世界に対するケストナーの憂いが表れたものではないだろうか。「9 月」をはじめとした『13 か月』に見られる戦争の要素も、現実に対する憂いの一つであり、人間の世界にある嘆かわしい出来事の一つとして、詩の中に表れているように思われる。

戦後のケストナーは批判性を後退させながらも、依然として読者に向けた詩を書こうとしていた。そして『13 か月』の中には自然の描写だけではなく、苦しみや悲しみを想起させる要素が含まれ、戦争と終末の要素も含まれている。こうした特徴から考えると、この詩集は悲しみの多い人間の世界に対す

る嘆きを含んだものであり、「9月」では破滅的な終わりをもたらす戦争を憂いて暗に批判しているのではないだろうか。

3-3. 作品成立時の社会状況

「9月」が持つメッセージの考察に入る前に、作品が執筆された1950年代前半当時の社会状況を確認していきたい。当時ケストナーは、ドイツ連邦共和国、いわゆる西ドイツのミュンヘンに住んでいたため、今回は西ドイツの社会状況に注目する。

1950年に始まった朝鮮戦争を機に、アメリカ、フランス、イギリスの西側諸国は、自由主義・社会主義に分断されたドイツにおいても、朝鮮半島と同様にソビエト連邦が西側領域に対し軍事的な侵略を行うのではないかと危惧した³⁵⁾。西ドイツは戦後長らく非武装が貫かれていたが、西側の三国は自衛の手段を与えることを検討し始めた。当時の西ドイツ首相アデナウアーもソ連に脅威を覚え、再軍備の計画を進めていった。1950年10月には早くも西ドイツ国防省の前身となるブランク機関が発足している。繰り返し西ドイツと西側三国との間で交渉が続けられた結果、西ドイツは1955年5月にNATOへ加盟し、再軍備が実現することとなった。再軍備案が持ち上がった当初から、ドイツ国内には厭戦的な雰囲気が漂っていた。しかし1950年代前半に生じた平和運動・反戦運動は、ほとんどが政治に影響を与える規模にはならないままに消えていった。再軍備に反対するデモが行われ、反対声明を出す者もいたが、再軍備の流れは止まらなかった。

岩間陽子によれば、反戦運動・平和運動が消えていった理由の一つは、当時の人々にとって安全保障問題の優先順位が低かったことであった。「やっと人間らしい生活を取り戻しつつあった人々」³⁶⁾にとっては、経済問題など他の問題の方が、安全保障問題より優先される事項であった。さらに、市民運動を支える学生層がまだ存在しなかったこと、西ドイツの主要な社会勢力が明確な再軍備反対を打ち出さず、その一方で再軍備に反対していた共産党や極右は信頼を得られなかったことも理由として挙げられている³⁷⁾。

3-4. 1950 年代前半の中で読む「9 月」

こうした時代背景を踏まえると、『13 か月』の随所に見られる戦争を思わせる要素は、再軍備に向かいつつある政治的動向と関連しているように思われる。『13 か月』の中に描かれた、戦争の気配が感じられる世界は、作品が執筆された当時の社会状況との繋がりも感じさせる。1950 年代前半の西ドイツは、まさに復興しつつある状況であった。しかし同時に東西陣営の対立や再軍備を巡る問題もあり、人々は戦争の予感も日々の中で抱いていたのではないかと思われる。また、この時代は核兵器の開発が進んでおり、戦争は核の脅威とも結びついていった。文学作品にも核兵器の使用に対する脅威や、核による世界の終わりを描いたものが見られる³⁸⁾。ケストナー自身も 1951 年にカバレット「小さな自由 (Die Kleine Freiheit)」で上演されたシャンソン「もぐら—あるいはあなたがたの御心のままに! (Die Maulwürfe oder Eure Wille geschehe!)」(II, 309-311)の中で、地上が荒廃して地下に住むようになった人間たちの様子を描いた。

軍事力を持つことで再び戦争に参加することになるのではないか。東西の武力衝突が決して非現実的な想像ではなかった時代において、そのような考えが出るのは自然なことであっただろう。クルツケによれば、ケストナーはドイツの再軍備とドイツ軍の創設に対する反対者で、ベトナム戦争の際にはこの戦争に反対する学生運動にも共感を示したという³⁹⁾。さらにケストナーは核兵器に対する反対運動にも加わっており、後には 1961 年の復活祭のデモ行進で参加者への挨拶を行った。こうした活動から、戦後のケストナーも、戦前と変わらず反戦的な思想を持ち続けていたと推察される。

ケストナーは 1954 年 5 月の講演「ドイツ人の忘れやすさについて (Von der deutschen Vergeßlichkeit)」(VI, 612-614)の中で、「政治家たちが未来と取り違えている過去への行進」「一昨日への壮麗な後退」(VI, 613)という表現を用いている。「9 月」が執筆されてから少し後の講演ではあるが、この時期にケストナーが過去に逆戻りしようとしている時代に対して危機感を覚

え、その傾向を否定的に捉えていたことがここに表れている。そして過去に戻る、すなわち戦争の再来の可能性を示すことで、戦争に向かいかねない政治傾向を批判し、歴史を繰り返そうとしていることを警告していると推察される。

「9 月」の中にも、歴史を繰り返そうとしている政治傾向への危機感が読み取れる。この作品では、収穫の季節が終わると冬、すなわち滅びの季節に向かっていくが、これは純粋な季節の移り変わりを示すだけではなく、平和で落ち着いた世界が再び戦争という滅びに向かっていこうとしていることの示唆とも受け取れる。また、この作品が 1950 年代の社会と関連していると考え、と、「9 月」の中に感じられる「戦争」は二つの戦争を示していると解釈できるだろう。一つは過去の戦争の名残で、これは復興を経て薄れつつあるが完全に忘れ去られてはいない第二次世界大戦の記憶である。もう一つは、これから訪れるかもしれない未来の戦争である。終わったと思った戦争が再び戻ってこようとしている。その状況に置かれて、本当は戦争が過ぎ去っていなかったと気が付く。だからこそ「9 月」では、これから始まるものが「過ぎ去ったと思われた」と表現されているのだろう。

旅立つホシムクドリや、風になびいて去っていく蜘蛛の糸は、別れの瞬間を示している。『13 か月』の前書きで「時は過ぎる。そして続く。どちらも一息のうちに起こる」(I, 300)と述べられているように、別れは始まりでもあるが、「9 月」は何かが始まる瞬間ではなく、何かが終わりに去っていく瞬間を描いており、始まりよりも終わりに注目して描かれた詩であるといえる。5 つの節に特徴的な「それは……と共にある別れだ」という文からも読み取れるように、この詩はまさに別れの詩であるといえよう。この作品では、「別れ」は賑やかな収穫祭の中に描かれているが、作中の情景に含まれる「軍旗」と「ラッパ」、「混乱」が「別れ」と結びつき、この関連が作中の別れに新たな印象を与えている。本来この作品の「別れ」とは悲しみをはっきりと表していない別れである。しかし戦争や混乱を感じさせる語と結びつくことで、戦争や混乱による悲しむべき「別れ」、つまり死も予感させる。

また、直線的な時間を生きる人間が滅びの季節である冬を迎えようとしていることが第5節で予感され、さらに「別れ」に悲しい印象を与えている。そして当時の社会状況を踏まえると、戦争や混乱を想起させる語や、それらの語と関連する悲しい別れのイメージは、新たな戦争への危機感とも関連しているように思われる。一見平穏な情景の作品に取り入れられた戦争と混乱の要素や、やがて訪れる滅びの予感は、人間の日々の暮らしにもそうした影がつきまどっていることを感じさせる。日常の中に戦争の影が見え隠れしているのは、詩の中の世界だけではなく、現実の世界でも同じであった。「9月」は、現実の社会とも繋がる、なおも消えない戦争の気配と死を予感させる要素を描くことで、戦争に向かっていく流れに対し暗示的な批判と警告を行っているのではないだろうか。

4. 終わりに

「9月」は賑やかな収穫の季節とそこに生きる人々の賑わいを描いている。これは『13か月』以前のケストナー作品には見られなかった、生命の存在がはっきりと感じられる、新しい秋の姿を描いた作品だといえよう。さらに季節の循環を感じさせる要素も見られ、円環的な時間意識が前面に出ている作品である。この時間意識は『13か月』全体に通ずるもので、詩集全体の主題の一つといえる。

先行研究の指摘通り、「9月」には自然という主題が強く感じられ、過去の作品と比べるとその点で変化している。しかし同時に戦争の気配を感じさせる要素も含まれ、純粋な自然賛美の詩ではない。詩集全体が人間の世界を悲しいものとして描写していること、再軍備に向かっていく社会の中で書かれたことを考えると、端々から感じられる戦争や終末の気配は、再び戦争へ向かっていこうとする政治への憂いと批判、そして警告でもあるだろう。社会情勢とも関連付けられる要素から、「9月」はこれまでに見られた社会に対する批判を含む詩としても理解できる作品ではないかと考えられる。

5. 今後の課題

本稿では「9月」を例として『13 か月』が持つ社会批判性について考察を行った。今後は他の作品に関しても同様の考察を行うと同時に、『13 か月』全体に見られる時間の描写や戦争との関連などの要素を踏まえて、詩集が持つ主題と特性を考察していく必要がある。さらに、今後は同時代の作品傾向と合わせての考察も重要である。先に述べたように、当時の文学が核の脅威と関連していることを考えると、『13 か月』にも、核の脅威を訴える意図が含まれている可能性がある。進みつつある核戦略に対する主張としての考察も、今後欠くことはできない。

【注】

- 1) 1952年11月29日付の編集者宛ての手紙で、ケストナーは十二の月を題材とした詩の執筆を承諾している。参考：Erich Kästner: Dieses Na ja!, wenn man das nicht hätte!: Ausgewählte Briefe von 1909 bis 1972. Hrsg. von Sven Hanuschek. Zürich (Atrium) 2003. S. 209.
- 2) Erich Kästner: Werke in neun Bänden. Hrsg. von Franz Josef Görtz. München (dtv) 2004. Band I. S. 474-475. (以下、この全集からの引用は Werke in neun Bänden. と記載し、巻数とページ数とともに表記する。また、第1, 2, 6巻からの引用は、本文中にローマ数字で巻数を、アラビア数字でページ数を表記する。)
- 3) Johan Zonneveld: Bibliographie Erich Kästner. Mit einer ausführlichen Zeittafel und zahlreichen Fotos von Stationen seines Lebens und den literarischen Schauplätzen. Band II. Sekundärliteratur, Teil I. Bielefeld (Aisthesis Verlag) 2011. S. 378-379.
- 4) Gerhard Seidel: Links vom Möglichen. In: Erich Kästner: Werk und Wirkung. Hrsg. von Franz Josef Görtz. Bonn (Bouvier) 1983. S. 61-69. S.69.
- 5) Remo Hug: Gedichte zum Gebrauch – Die Lyrik Erich Kästners: Besichtigung, Beschreibung, Bewertung. Würzburg (Könighausen&Neumann) 2006. S. 106. (以下この論文からの引用は Hug と記載し、ページ数と共に表記する。)
- 6) スヴェン・ハヌシェク、高橋健二による伝記でも同様にその牧歌性や悲哀を内包する性質を指摘されるにとどまっている。また、クラウド・コルドンは人生のすばらしさを振り返る作品だと捉えている。参考：Sven Hanuschek: Keiner blickt dir hinter das Gesicht: das Leben Erich Kästners. München (Carl Hanser) 1999. S. 380. (以下、本書からの引用は Hanuschek (1999) と記載し、ページ数と

- 共に表記する。) , Klaus Kordon: Die Zeit ist kaputt. Die Lebensgeschichte des Erich Kästners. Weinheim und Basel (Beltz) 1994. S. 292. 高橋健二『ケストナーの生涯―ドレーズデンの抵抗作家』福武文庫、1992 年、200 ページ。なお、コルドンの著書の邦訳として『ケストナー―ナチスに抵抗し続けた作家』（那須田淳・木本栄訳、偕成社、1999 年。）があるが、情報の補足が加筆された箇所や、構成の変更が見られるほか、一部には訳出されていない箇所もあるなど、原文からの変更点が多く見られる邦訳となっている。
- 7) Luiselotte Enderle: Erich Kästner in Selbstzeugnissen und Bild- dokumenten. Rein bek bei Hamburg (Rowohlt) 1966. S. 109. 清沢訳。
 - 8) Klaus Doderer: Erich Kästner: Lebensphasenpolitisches – Engagement – literarisches Wirken. Weinheim und München (Juventa) 2002. S. 94-95.
 - 9) Werke in neun Bänden. Band I. S. 299. 清沢訳。以下、本稿で扱うケストナーからの引用文の訳は、執筆者が指導教授の助言のもとで作成したものを使用する。
 - 10) Altweibersommer とは、晴れた温かい春または秋の日に空中を流れていく、非常に小さな若い蜘蛛が紡いだ糸のこと。参考：Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Band I. Hrsg. von Eduard Hoffmann-Krayer; Hanns Bächtold-Stäubli. Berlin und Leipzig (de Gruyter) 1927. S. 351.
 - 11) Bernhardt, S. 174.
 - 12) 「アルムの家畜おろし」の風習については植田重雄『ヨーロッパ歳時記』岩波書店、1983 年、185-187 ページを参考にした。（以下、本書からの引用は植田と記載し、ページ数とともに表記する。）
 - 13) Bernhardt, S. 170.
 - 14) 収穫に関する民俗学的情報は、次の文献を参考にした：福嶋正純『図説 ヨーロッパ歳時記―ドイツの年中行事―』八坂書房、2016 年、134、140-141、152-154 ページ。植田、190 ページ。
 - 15) Werke in neun Bänden. Band II. S.416. 清沢訳。
 - 16) Bernhardt, S. 170.
 - 17) Hug, S. 105.
 - 18) 戦前の秋の詩 6 編と、「秋らしい逸話」は、ベルンハルトが秋の詩として比較考察を行った作品である。本稿ではこの考察を参照し、この 7 編を考察対象に含めた。参考：Bernhardt, S. 165-167.
 - 19) 各作品の初出年はそれぞれ「秋の紳士」（1927）、「列車からの秋」（1929）、「雨の 11 月」（1929）、「全くの秋」（1930）、「全方位への悲歌」（1930）、「模範的な秋の夜」（1931）、「秋の歌」（1946）、「秋らしい逸話」（1948）である。初出年の情報は Werke in neun Bänden. Band I な

らびに Band II の Kommentar を参照した。

- 20) Bernhardt, S.171.
- 21) Johann Wolfgang Goethe: Selige Sehnsucht. In: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche: vierzig Bände. West-Östlicher Divan. Teil I. Hrsg. von Hendrik Birus. Frankfurt am Main (DKV) 1994. S. 25.
- 22) ジャック・アタリ : 『時間の歴史』 蔵持不三也訳、原書房、1986 年、14-16 ページ。
- 23) 滝浦静雄『時間：その哲学的考察』岩波書店、1976 年、39 ページ。
- 24) 同上、42 ページ。
- 25) ロベール・ドロール『中世ヨーロッパ生活誌』桐村泰次訳、論創社、2014 年、198 ページ。
- 26) Hanuschek (1999), S. 240.
- 27) Hanuschek (1999), S. 341.
- 28) Werke in neun Bänden. Band I. S. 463-474.
- 29) Franz Josef Görtz, Hans Sarkowicz: Erich Kästner. Eine Biographie. München (Piper Verlag) 1998. S. 308.
- 30) Bernhardt, S. 174.
- 31) Sven Hanuschek: Erich Kästner. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 2015. S. 108.
- 32) Werke in neun Bänden. Band I. S. 388-389.
- 33) ジャン・シュヴァリエ, アラン・ゲールブラン『世界シンボル大辞典』金光仁三郎他訳、大修館書店、1996 年、714-715 ページ。
- 34) ケストナーの詩の戦争との関連、ならびに反戦・反軍国主義要素に関する言及は次の論文・文献を参考にした。永畑紗織「皮肉屋さんケストナーの詩の世界」144-150 ページ：青地伯水編著『エーリヒ・ケストナー：こわれた時代のゆがんだ鏡』松籟社、2012 年、135-163 ページ。文学教育研究者集団編『ケストナー文学への探検地図：「飛ぶ教室」「動物会議」の世界へ』こうち書房、2004 年、211 ページ。Hanuschek (1999). S. 55-56, 132.
- 35) 1950 年代の社会状況、再軍備までの経緯、反対運動に関する記述は、次の文献を参考にした。：岩間陽子『ドイツ再軍備』中央公論社、1993 年。（以下、本書からの引用は岩間と記載し、ページ数とともに表記する。）三島憲一『戦後ドイツ：その知的歴史』岩波書店、1991 年、52-56 ページ。
- 36) 岩間、160 ページ。
- 37) 同上、166-170 ページ。
- 38) 戦後の核に関する文学については、次の文献を参考にした：Helga Raulff: Strahlungen. Atom und Literatur. Mit zum Teil unveröffentlichen Texten von Hermann Broch, Hans Blumenberg, und Karl Löwith, kommentiert von

Marcel Lepper, Jan Bürger und Reinhard Laube. Marbach (Deutsche Schillergesellschaft) 2008. S. 83-94.
39) Werke in neun Bänden. Band II. S. 416.

参考文献

【一次文献】

Kästner, Erich: Werke in neun Bänden. Hrsg. von Franz Josef Görtz. München (dtv) 2004.
Kästner, Erich: Dieses Na ja!, wenn man das nicht hätte!: Ausgewählte Briefe von 1909 bis 1972. Hrsg. von Sven Hanuschek. Zürich (Atrium Verlag) 2003.
Kästner, Erich: Bei Durchsicht meiner Bücher. Zürich (Atrium Verlag) 1985.
Kästner, Erich: Das große Erich Kästner Buch. Hrsg. von Silvia List. München (R.Piper&Co. Verlag) 1975. (邦訳: リスト, シルヴィア編『大きなケストナーの本』丘沢静也他訳、マガジンハウス、1995年。)

【二次文献】

・ケストナー研究・伝記 (ドイツ語文献)

Bemmann, Helga: Humor auf Taille. Erich Kästner-Leben und Werk. Berlin (Verlag der Nation) 1983.
Bernhardt, Rüdiger: Kästner. Das lyrische Schaffen: Interpretationen zu den wichtigsten Gedichten Taschenbuch. Hollfeld (Bange) 2010.
Doderer, Klaus: Erich Kästner: Lebensphasen-politisches Engagement- literarisches Wirken. Weinheim und München (Juventa) 2002.
Enderle, Luiselotte: Kästner: eine Bildbiographie. München (Kindler) 1960.
Enderle, Luiselotte: Erich Kästner in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1966.
Hanuschek, Sven: Keiner blickt dir hinter das Gesicht: das Leben Erich Kästners. München (Carl Hanser) 1999. (邦訳: ハヌシェク、スヴェン『エーリヒ・ケストナー 謎を秘めた啓蒙家の生涯』藤川芳朗訳、白水社、2010年。)
Hanuschek, Sven: Erich Kästner. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 2015.
Hug, Remo :Gedichte zum Gebrauch — Die Lyrik Erich Kästners: Besichtigung, Beschreibung, Bewertung. Würzburg (Könighausen&Neumann) 2006.
Görtz, Franz Josef; Sarkowicz, Hans: Erich Kästner. Eine Biographie. München (Piper Verlag) 1998.
Kordon, Klaus: Die Zeit ist kaputt. Die Lebensgeschichte des Erich Kästners. Weinheim und Basel (Beltz) 1994. (邦訳: コルドン, クラウス『ケストナー——ナチスに抵抗し

続けた作家』那須田淳・木本栄訳、偕成社、1999年。）

Seidel, Gerhard: Links vom Möglichen. In: Kästner, Erich; Werk und Wirkung. Bonn (Bouvier) 1983. S.69.

Zonneveld, Johan: Bibliographie Erich Kästner. Mit einer ausführlichen Zeittafel und zahlreichen Fotos von Stationen seines Lebens und den literarischen Schauplätzen. Bielefeld (Aisthesis Verlag) 2011.

・ケストナー研究・伝記（日本語文献、邦訳）

青地伯水編著『エーリヒ・ケストナー：こわれた時代のゆがんだ鏡』松籟社、2012年。

高橋健二『ケストナーの生涯——ドレーズデンの抵抗作家』福武書店、1992年。

文学教育研究者集団編『ケストナー文学への探検地図：「飛ぶ教室」「動物会議」の世界へ』こうち書房、2004年。

・その他

Goethe, Johann Wolfgang: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche: vierzig Bände. West-Östlicher Divan. Teil 1. Hrsg. von Hendrik Birus. Frankfurt am Main (DKV) 1994.

Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Band I. Hrsg. von Hoffmann-Krayer, Eduard/ Bächtold-Stäubli, Hanns. Berlin und Leipzig (de Gruyter) 1927.

Raulff, Helga: Strahlungen. Atom und Literatur. Mit zum Teil unveröffentlichten Texten von Hermann Broch, Hans Blumenberg, und Karl Löwith, kommentiert von Marcel Lepper, Jan ünger und Reinhard Laube. Marbach (Deutsche Schillergesellschaft) 2008.

岩間陽子『ドイツ再軍備』中央公論社、1993年。

植田重雄『ヨーロッパ歳時記』岩波書店、1983年。

滝浦静雄『時間：その哲学的考察』岩波書店、1976年。

福島正純『図説 ヨーロッパ歳時記—ドイツの年中行事—』八坂書房、2016年。

三島憲一『戦後ドイツ：その知的歴史』岩波書店、1991年。

アタリ, ジャック『時間の歴史』蔵持不三也訳、原書房、1986年。

シュヴァリエ, ジャン; ゲールブラン, アラン『世界シンボル大辞典』金光仁三郎他訳、大修館書店、1996年。

ドロール, ロベール『中世ヨーロッパ生活誌』桐村泰次訳、論創社、2014年。

（きよさわ なほ・博士前期課程在学中）